

演題名：非アテローム性動脈硬化を伴う犬の腹大動脈血栓塞栓症の1例

発表者氏名：○山村知香¹⁾ 遠藤千尋¹⁾ 大池三千男¹⁾ 寒川彰久²⁾ 古林与志安²⁾

発表者所属：1) おおいけ動物病院 2) 帯畜大・病態獣医

1. はじめに：大動脈血栓塞栓症は、犬での報告は比較的少なく、その原因の特定に苦慮することがある。また、近年の食餌や飼育環境の変化、平均寿命の延長など様々な要因で犬の動脈硬化症の発生が増加してきている。今回我々は、間欠性の両後肢の跛行を呈した雑種犬を腹大動脈血栓塞栓症と診断し治療を行った。その後、腎不全により死の転帰をとり、病理検索により腹大動脈血栓塞栓症と動脈硬化症であった1例についてその概要を報告する。

2. 症例および経過：雑種犬、未去勢雄、体重12.7kg、12歳齢で右後肢の跛行を主訴として本院に来院した。その後も跛行を繰り返し、第21病日、排便後に後躯麻痺と疼痛がみられ、再来院した。両後肢は冷たく、両股動脈とも触知不能で、爪切り検査でも出血は認められなかった。血液検査所見では、高脂血症 (T-cho 450mg/dℓ以上)、低アルブミン血症 (ALB 2.6g/dℓ) が認められ、収縮期血圧が248mmHg、拡張期血圧が171mmHgと高血圧であった。また、尿検査では蛋白陽性を示し、尿Pro/Cre比は4.28であった。リボタンパク検査では高コレステロールLDL血症(89.61 mg/dℓ)がみられたが、甲状腺ホルモン検査では、甲状腺機能低下症は否定的であった。以上の結果から、動脈硬化または糸球体腎炎から続発した血栓塞栓症と仮診断した。治療は、低分子ヘパリン、ウロキナーゼ、低容量アスピリン、ペナゼブリル、脂質代謝改善剤を投与し、低脂肪食に変更した。その後、数回の跛行は見られたが、歩行はほぼ正常に改善した。しかし、徐々に腎不全が悪化し、第227病日に死亡した。剖検では、腹大動脈、腎動脈、腹腔動脈、外腸骨動脈などで、重度の血栓形成がみられた。病理組織学的検査では、血栓形成に加えて、腹部大動脈を中心に内膜増生を特徴とする動脈硬化性変化が観察された。また、腎臓は終末腎の様相を呈し、多巣性に萎縮・間質線維化がみられ、一部では梗塞性瘢痕も認められた。糸球体腎炎の存在を示唆する所見は得られなかった。

3. 考察：本症例はヒトで多くみられるアテローム性動脈硬化症とは異なる、非アテローム性動脈硬化症であった。加齢により進行した動脈硬化に、高血圧や高脂血症などの要因が加わり、今回のような重度な血栓塞栓症を発症したと推察された。また本症例は臨床的に安定していたが、血栓形成による腎臓への影響を予防するためにもワルファリンの投与が必要であったと考えられた。本症例でみられた動脈硬化は、他の原因で死亡した高齢犬でもみられるような変化であるため、高齢犬で高血圧や高脂血症などの基礎疾患がある場合は、血栓塞栓症を発症する可能性があると考えられた。